

応用研究論文

秋田県における哲学のニーズと寄与について

公開講座秋田哲学塾の開催を通じて

鈴木祐丞¹¹ 秋田県立大学総合科学教育研究センター

哲学という学問は現在、国からは冷遇されているものの、一般の方々からは大きな期待を集めているように思われる。都市部においては哲学研究者がその期待に応える活動（哲学カフェや子どものための哲学授業の開催など）を積極的に行うようになってきているが、秋田県においてはそうした活動はこれまでほぼ皆無であった。秋田県における哲学を通じた地域貢献活動の可能性を探るために、秋田県における哲学のニーズと寄与を明らかにするための研究を行った。平成 28 年度、本学総合科学教育研究センター主催の公開講座秋田哲学塾を計五回開催し、アンケートなどにより必要なデータを収集した。データから次のような結論が導き出された。秋田県においては、哲学のニーズが潜在的には高いものの、これまでそのニーズに応えるような機会がほとんど提供されておらずそのニーズがあまり表面化してこなかったのであるが、哲学は秋田県に対して大きな寄与をなしうるし、そうすることが期待されている。

キーワード：哲学，秋田哲学塾，地域貢献

哲学という学問は現在、国からは冷遇されつつも、一般の方々（非大学関係者）からは大きな期待を集めているように思われる。一方で、2015 年 6 月 8 日付の文部科学省による全国の国立大学への通達「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」の内容に象徴されるように、専門的なレベルでの哲学の研究・教育は少なくとも国立大学においてはさほど必要ないという判断が国によって下されている¹。今後、とくに地方の国立大学では、「哲学科」のような部局は姿を消すか、少なくとも規模を縮小してゆくことが予想される。哲学のような国益に直結しにくい非実学に対する国家予算の配分の優先順位は、どうしても低くなってしまいうわけである。他方で、哲学とは、本質的には、いろいろなことについてとことんまで考え抜くという営みに他ならず、われわれがおよそ何をするにせよ哲学は長期的に見れば必要不可欠であるのは確かなことだろう²。哲学はそのようなものとして、現在国からは冷遇されているものの、じつはきわめて重要である

にちがいないと直感している一般の方々は少なくない。「ニーチェ」などの哲学者の名前を最近いろいろなところで耳にすることや、哲学の入門書——『史上最強の哲学入門』³ など——の売れ行きが好調のようであることは、その表れと考えられる。つまり、大学の哲学科で研究・教育されるような高度に専門的で抽象的なレベルでの哲学についてはそれほど必要ないという判断が国によって下されている一方で、本質的な意味での哲学の重要性については、一般の方々によりかえって強く認識されており、かくして一般の方々の哲学に対する期待は高まってきているというのが、哲学をめぐる日本の現状であるものと思われる。

とくに都市部においては、哲学を専門とする研究者たちが、哲学をめぐるこのような現状を把握し、一般の方々の哲学への期待に応えるような活動を積極的に行うようになってきている。例えば、東京をはじめ各地で哲学カフェが開催されているし、大阪や仙台では子どものための哲学授業（P4C:

責任著者連絡先：鈴木祐丞 〒010-0195 秋田市下新城中野字街道端西 241-438 公立大学法人秋田県立大学総合科学教育研究センター。E-mail: y-suzuki@akita-pu.ac.jp

Philosophy for Children) の活動が広がりを見せている。

それでは、ここ秋田県においてはどうか。秋田県には哲学を専門とする研究者が県内の大学に筆者を含めて数名いるものの、哲学研究者が一般の方々のために哲学カフェや公開講座などを開催したという例は、筆者の知るかぎりでは存在しない。つまり、都市部においては、一般の方々の哲学への期待に専門の研究者が応え、それによって哲学が人々や社会に何らかの形である程度は寄与していると考えられる一方で、秋田県においてはそのような寄与がほぼ皆無のようだということである。

秋田県立大学において哲学の研究・教育に携わる者として、哲学を通じた地域貢献活動を行いたいと考えてきた。秋田県においては一般の方々の哲学への期待がこれまでほとんど汲み取られてこなかったという上述の状況を考慮して、哲学に関連する何らかのイベントを立ち上げて常設化するのに先立ち、ひとまず今年度（平成 28 年度）、秋田県における哲学のニーズと寄与を明確にすることを目的とした研究を行うことにした。秋田県においてもやはり哲学へのニーズは高いのかどうか、哲学が秋田県に対して何らかの寄与をなしているのかどうか、今年度の研究でまずはっきりさせるということであり、その上でその結果を手がかりに今後の哲学を通じた地域貢献活動の有無や方向性を考えるということである。研究方法は、中学生以上を対象とした公開講座秋田哲学塾（詳細は後述）を試験的に開催し、それによって得られるさまざまなデータを分析するというものである。なお、本学の平成 28 年度部局提案型研究推進事業の研究費を本研究の予算として活用した。

この研究は、平成 28 年度だけでなく、予算が確保されれば平成 29 年度も継続して行う予定であるが、本論文では平成 28 年度の研究の成果をまとめた。はじめに秋田哲学塾について説明する。その上で、秋田県における哲学のニーズと寄与に関して、まず秋田哲学塾の開催を通じて収集したデータをまとめ、その上でそのデータから見えてくる結論をまとめた。

秋田哲学塾について

本研究の目的は、秋田県における哲学のニーズと寄与を明らかにすることである。この目的のために、平成 28 年度、一般の方々向けの公開講座秋田哲学塾を開催し、必要なデータを収集した。以下では、秋田哲学塾の概要について、その広報活動について、秋田哲学塾の参加者に記入してもらったアンケートについて、説明する。

秋田哲学塾の概要

秋田哲学塾は、本学総合科学教育研究センター主催の、中学生以上を対象とした参加費無料の公開講座である。第一回を 2016 年 5 月 29 日、第二回を 6 月 5 日、第三回を 6 月 19 日、第四回を 6 月 26 日、第五回を 9 月 25 日に開催した。いずれも、日曜日、時間は 13 時 30 分から 16 時 30 分まで、会場は秋田市のカレッジプラザの講堂であった。

第一回のテーマは「キェルケゴール——日記に読み解くその全貌」で、筆者（秋田県立大学助教）が講師となった。第二回のテーマは「ウィトゲンシュタイン——哲学の問題にどう向き合うか：こころってどんなもの？」で菅崎香乃氏（筑波大学大学院生）が講師、第三回のテーマは「ニーチェ——哲学者としての生と三つの問い」で梅田孝太氏（上智大学非常勤講師）が講師、第四回のテーマは「カント——経験主義との対決」で栗原拓也氏（筑波大学大学院生）が講師であった。第五回のテーマは「われわれは肉をボイコットすべきか——集約的畜産の倫理的是非」で、伊勢田哲治氏（京都大学准教授）と岡田千尋氏（NPO 法人アニマルライツセンター代表理事）が講師であった。第一回から第四回は、一般的認知度の比較的高い哲学者を四人取り上げ、それぞれの思想のエッセンスを、専門の研究者が一般向けに分かりやすく解説する、という内容であった。筆者は、第一回で講演者を務めたほか、第二回から第四回においては講演者とともにステージに上がり、講演内容についてのまとめや質問等を通じて参加者の理解を助けた。第五回は、個々の哲学者ではなく動物倫理というテーマを扱い、この問題に造詣の深い専門家二人による一時間ずつの講演のあと、講演

者と聴講者とのあいだで一時間程度意見交換を行った。筆者はコーディネーター役を務めた。

なお、本研究のために参加者に関するデータを収集する必要があるため、参加申し込みの際に、氏名と電話番号だけでなく、住所（居住する市町村）、年齢、職業も伝えてもらった。

広報活動について

第一回から第四回を2016年度前期、第五回を2016年度後期とし、広報活動は前期と後期の二回行った。それぞれについて、広報活動で活用した媒体とその説明を以下に述べる。

前期（第一回から第四回）。

（1）チラシとポスター

第一回から第四回秋田哲学塾の概要などを記したチラシ6,500部とポスター250部を作成した。送付先は、県内の中学校以上のすべての学校、県内のすべての役所、秋田県生涯学習センター、秋田県立図書館、秋田県立美術館、秋田市立千秋美術館、秋田拠点センターアルヴェ、カレッジプラザ、にぎわい交流館AU、遊学舎などであった。4月上旬には送付した。

（2）新聞

5月19日の『秋田魁新報』11面の「募集」コーナー、5月25日の『読売新聞』32面の「Wednesday あきた」の「講座」コーナーで、秋田哲学塾について簡単に紹介してもらった。5月27日の『秋田魁新報』17面の「文化」コーナーに、「哲学の現在地——公開講座『秋田哲学塾』の開催に寄せて」という2,000字程度の小論（秋田哲学塾の理念と内容などをまとめたもの）を寄稿した。

（3）秋田県立大学ホームページ

5月上旬ころ、本学ホームページのトップページ「大学からのお知らせ」コーナーで、秋田哲学塾について告知した。

後期（第五回）。

（1）チラシとポスター

第五回秋田哲学塾の概要などを記したチラシ5,000部とポスター200部を作成した。送付先は、県内の高校以上のすべての学校、県内のすべての役所、県内のすべての公立図書館、秋田市の五つ

の市民サービスセンター、秋田県生涯学習センター、秋田県立美術館、秋田市立千秋美術館、秋田拠点センターアルヴェ、カレッジプラザ、にぎわい交流館AU、遊学舎などである。7月中旬には送付した。

（2）新聞

9月15日の『秋田魁新報』11面の「雑記帳」コーナー、同日の『毎日新聞』24面の「情報アラカルト」の「講演・講座」コーナーで、第五回秋田哲学塾について簡単に紹介してもらった。

（3）秋田県立大学ホームページ

8月下旬ころ、本学ホームページのトップページ「大学からのお知らせ」コーナーで、秋田哲学塾について告知した。

（4）広報誌

秋田市の広報誌「広報あきた」8月19日号18ページの「みんなの掲示板」コーナー、美郷町の広報誌「広報美郷」9月号29ページの「情報ひろば」コーナーで、第五回秋田哲学塾について簡単に紹介してもらった。

（5）秋田哲学塾ホームページ

9月上旬に秋田哲学塾の公式ホームページ（<http://akitatetsugakujuku.jimdo.com/>）を立ち上げ、秋田哲学塾の設立趣旨や活動内容を記するとともに、第五回の開催の告知をした。

アンケートについて

秋田哲学塾の参加者全員にアンケートへの協力をお願いした。アンケートの設問は基本的に全回共通で、以下の通りである（選択式の設問については、選択肢を〔 〕に入れて記す）。

（1）性別

〔男性〕〔女性〕

（2）年齢

〔10代〕〔20代〕〔30代〕〔40代〕〔50代〕〔60代〕〔70代〕〔80代〕〔90代～〕

（3）今回の内容につきまして、ご感想やご意見等、自由にご記入ください。

（4）次回以降の秋田哲学塾で改善すべき点などがございましたら、教えてください。

(5) 秋田哲学塾について、どのようにお知りになりましたか？

〔チラシ・ポスターを見た〕〔秋田県立大学のホームページで見た〕〔秋田哲学塾のホームページを見た〕〔新聞の記事を読んだ〕〔家族や知人に教えてもらった〕〔その他〕

(6) 設問 (5) で「チラシ・ポスターを見た」にチェックを入れた方にお尋ねします。どこでチラシ・ポスターをご覧になりましたか？

(7) 秋田哲学塾に参加された動機を教えてください。

(8) ふだんどれくらい哲学関連の本を読まれますか？

〔ほとんど読まない〕〔一年に一冊程度〕〔半年に一冊程度〕〔一か月に一冊程度〕〔その他〕

(9) これまで秋田県で哲学関連の講座などに参加されたことはありますか？

〔ある〕〔ない〕

(10) 設問 (9) で「ある」にチェックを入れた方にお尋ねします。どのような講座に参加されたか、かたんに教えてください。

(11) 今後も秋田哲学塾が開催されることを望まれますか？ その理由もお答えください。

〔望む〕〔どちらかと言えば望む〕〔どちらでもよい〕〔あまり望まない〕〔望まない〕

(12) 設問 (11) で「望む」もしくは「どちらかと言えば望む」にチェックを入れた方にお尋ねします。今後どのようなテーマや哲学者を扱うことを希望されますか？

(13) その他、何かございましたらご記入ください。

いくつか補足して説明しておきたい。

設問の意図であるが、(1) (2) は参加者の身分に関するもの、(3) (4) はその回および次回以降の内容や形式などに関するもの、(5) (6) は広報活動に関するもの、(7) から (11) は哲学のニーズと寄与に関するもの、(12) は来年度 (以降) の秋田哲学塾の内容に関するものである。

アンケートへの協力の依頼にあたって、全員にすべての設問への回答を求めたわけではない。第二回以降の秋田哲学塾の参加者の多くはリピーターであった。リピーターの場合、設問 (5) から (12) への

回答は、以前アンケートに記入した際の回答と同じになることが予想されたことから、設問 (1) から (4) および (13) にのみ回答してもらうようにした⁴。

したがって、設問 (1) から (4) および (13) の回答数は回収したアンケートの数と近くなる一方、設問 (5) から (12) の回答数はアンケートに回答した方の数と近くなったはずである。

秋田県における哲学のニーズと寄与

先述の通り、秋田県における哲学のニーズと寄与を明らかにするために、公開講座秋田哲学塾を開催し、データを収集した。収集したデータは、大別すると、参加者に関するもの (参加者数やその男女比など) と、アンケートの結果である。以下では、まず、これら二種類のデータをそれぞれまとめる。その後、秋田県における哲学のニーズと寄与について、これらのデータから結論を導き出したい。

データのまとめ

参加者に関するもの。

第一回から第五回までの秋田哲学塾の参加者の人数、男女比、平均年齢、居住市町村、職業を、表 1 にまとめる。

平均年齢については小数第二位を四捨五入した。職業については多いものだけを記した。職業の「教員」は、高校または大学の教員である。「大学生」には、短大生、大学生、大学院生を含めている。参加者数は延べ 410 人、ユニーク数では 209 人であった。

表1 秋田哲学塾の参加者に関するデータ

	人数 (人)	男女比 (男：女)	平均年齢 (才)	居住市町村 (人)	職業 (人)
第一回	105	65：40	52.6	秋田市 87, 大仙市 3, 由利本荘市 3, にかほ市 2, 横手市 2, 大潟村 2, 男鹿市 1, 潟上市 1, 能代市 1, 羽後町 1, 美郷町 1, 三種町 1	無職 33, 公務員 14, 大学生 9, 教員 7, 会社員 6, 自営業 5
第二回	85	52：33	49.6	秋田市 74, にかほ市 2, 男鹿市 1, 大仙市 1, 能代市 1, 由利本荘市 1, 横手市 1, 羽後町 1, 美郷町 1, 三種町 1, 大潟村 1	無職 21, 公務員 10, 大学生 10, 会社員 9, 高校生 6, 教員 5, 自営業 3
第三回	76	49：27	55.5	秋田市 66, 潟上市 2, にかほ市 2, 男鹿市 1, 大仙市 1, 由利本荘市 1, 能代市 1, 美郷町 1, 三種町 1	無職 18, 会社員 8, 公務員 8, 教員 7, 大学生 6, 自営業 5
第四回	60	41：19	51.2	秋田市 52, にかほ市 2, 大館市 1, 男鹿市 1, 大仙市 1, 湯沢市 1, 由利本荘市 1, 美郷町 1	無職 12, 公務員 8, 大学生 7, 教員 6, 会社員 5, 自営業 4
第五回	84	35：49	43.1	秋田市 62, 由利本荘市 6, 仙北市 3, 大仙市 3, にかほ市 2, 北秋田市 1, 能代市 1, 湯沢市 1, 美郷町 1, 三種町 1, 大潟村 1, 東京都 1, 仙台市 1	無職 15, 大学生 12, 高校生 11, 公務員 9, 教員 7, 会社員 4

アンケートの結果.

回収したアンケートの数は、第一回 82 枚, 第二回 58 枚, 第三回 42 枚, 第四回 35 枚, 第五回 61 枚の, 計 217 枚であった。

アンケートのうち、哲学のニーズと寄与に関わる設問 (7) から (11) の結果を、以下にまとめる。

(7) 秋田哲学塾に参加された動機を教えてください。

当然のことながら、ほとんどの回答 (160 人) が「哲学 (哲学という学問, 今回取り上げる哲学者, 今回のテーマなど) に関心があったから」にまとめられる内容であった。こうした内容の回答のうちとくに傾聴に値すると思われるものを二つ、下に引用しておく。

「学生時代、思想や文学に関心があり、友人たちと議論もしていたが、社会人になり、当時の人間関係から離れると、そういうものを見聞きする場が (読書以外で) 失われてしまった。ここに来れば、そういうものを再び見聞きできるのでないかと思った」

(第三回, 30 代男性)。

「学生時代に哲学が好きだったので、ポスターを拝見し、参加したいと思いました。何歳になっても『学び続ける機会がある』ということは、とても魅力的であると感じます」(第四回, 30 代女性)。

「哲学に関心があったがこれまで哲学を学ぶ機会がなかったから」という回答もいくらか (8 人) 見られた。以下がその諸例である。

「一度哲学の講義を受けてみたいとかねがね思っていました。新聞で知り、私でも受講していいのだと気軽に参加した」(第一回, 60 代女性)。

「夫がポスターの案内を見かけて、秋田ではめずらしいね、という話になり、面白そうでは? と思って参加しました (実際来てみたら出席者がたくさんいらしたので、こうしたニーズは高いのかな、と思いました)」(第一回, 40 代女性)。

「秋田で手軽に参加できる哲学の会はあまりないと思うので、興味があったのでいい機会でした」(第三回, 30 代男性)。

他にも、「人生について考え直したいから」、「哲学を独学で学ぶことに限界を感じたため」といった回答もあった。

(8) ふだんどれくらい哲学関連の本を読まれますか？

「ほとんど読まない」が 98 人、「一年に一冊程度」が 34 人、「半年に一冊程度」が 41 人、「一か月に一冊程度」が 29 人、「その他」が 18 人であった。「その他」の説明としては、「不定期」「毎日」「週に一冊程度」などがあつた。

(9) これまで秋田県で哲学関連の講座などに参加されたことはありますか？

「ある」が 17 人、「ない」が 183 人であった⁵。

(10) 設問 (9) で「ある」にチェックを入れた方にお尋ねします。どのような講座に参加されたか、かんたんに教えてください。

秋田大学や秋田県立大学、放送大学での何らかの講座(いずれも詳細は不明)に参加したことがある、という回答がいくつかあつた。それ以外には、大学コンソーシアムあきたの高大連携授業、秋田県教育委員会主催の高校生将来設計ガイダンスの学問別ガイダンスなどの回答があつた。

(11) 今後も秋田哲学塾が開催されることを望めますか？ その理由もお答えください。

「望む」171 人、「どちらかと言えば望む」33 人、「どちらでもよい」14 人、「あまり望まない」0 人、「望まない」1 人であった。

「望む」あるいは「どちらかと言えば望む」こと理由としてもっとも多かったのは、「今後も哲学を続けたいから」にまとめられる回答であつた。

その他に多かった回答は、「秋田県(市)にとって有益だから」というものであつた。以下がその諸例である。

「学生でなければ受けられない講座を身近に聞けるのは秋田市民にとって意識の向上になると思います」(第一回, 60 代男性)。

「秋田県全体の文化レベルの向上につながります」(第一回, 30 代男性)。

「地方創生は知的関心の高い人々を地方の知的興味を引く催しで都会から……呼び寄せるべきである。都会では人々が多すぎてよい講座が少ないかコスト

が高い」(第二回, 50 代男性)。

その他にも、「哲学は独学では難しいから」「生涯学習のために」「痴呆の予防のため」などの回答や、下のような回答もあつた。

「秋田大学がやるべきことなのでしょうが、やってこなかったのだから(!!)。ぜひ続けてください」(第一回, 40 代男性)。

「……先生陣が素晴らしいから。若い先生の方がおもしろいような気がする」(第二回, 30 代女性)。

「どちらでもよい」理由としては「内容次第」が多かった。「望まない」理由は「内容が難しかったから」であつた。

結論

データ全体から導き出される結論としては、(1) 秋田県においては哲学のニーズが潜在的には高いものの、(2) 秋田県においてはこれまでそのニーズに応えるような機会がほとんど提供されておらずそのニーズがあまり表面化してこなかったのであるが、(3) 哲学は秋田県に対して大きな寄与をなしうるし、そうすることが期待されている、となるだろう。以下、(1) から (3) について解説する。

(1) 秋田哲学塾への参加者数(延べ 410 人、一回平均 82 人。「秋田哲学塾の参加者数に関するデータ」参照)から、また、(当然のことではあるが)参加者の多くが哲学への高い関心を持っていた(アンケートの設問 (7) のデータ参照)ことから、秋田県における哲学のニーズの高さを結論づけることが可能であるだろう。ただし、秋田哲学塾への参加者の中ですら哲学関連の本を定期的に読む人の割合は限られており(アンケート回答者のうち約 45%の人が哲学関連の本をふだんほとんど読まない。アンケートの設問 (8) のデータ参照)、そのニーズは多くの場合潜在的なものであると考えた方がよさそうである。

(2) 秋田県における哲学の潜在的なニーズの高さにもかかわらず、秋田県においては人々が独学以外で哲学を学ぶ機会がこれまで十分に提供されてこなかったと言えそうである(アンケートの設問 (7) (9) (10) (11) のデータ参照)。

これまで秋田県で哲学関連の講座に参加したことのある方は、アンケート回答者のうちわずか 8.5% (17 人) に過ぎない。筆

者を含めた秋田県内の大学に所属する哲学研究者が、既存の枠組み（高大連携授業や将来設計ガイダンスなど）以外の地域貢献活動を積極的に行ってこなかったことが、その要因のようである（アンケートの設問（7）（10）（11）のデータ参照）。秋田県の一般の方々の多くは、哲学に対する潜在的なニーズを持っていたのだが、実際に哲学に接する機会がこれまでほとんどなく、その結果そのニーズがあまり表面化してこなかったというのが実情だったと言えそうである。

（3）秋田哲学塾を通じて哲学に触れる機会を持った方々のほとんど（アンケート回答者のうち約93%）が、秋田哲学塾の継続的な開催を希望した（アンケートの設問（11）のデータ参照）。そう希望する理由としては「今後も哲学を続けたいから」という内容がもっとも多かったが、それは、さらに言えば、「秋田県に哲学が根付くことにより意識の高い人が増え、秋田県の文化レベルの向上につながるから」ということでもあった。また、秋田哲学塾のようなイベントの存在自体が都会から人々を呼び寄せるものとなりうるのであり、地方創生につながる、という回答もあった。こうしたことから、哲学は、秋田県に対して大きな寄与をなしうるし、そうすることが期待されている、と結論づけられるだろう。

最後に

アンケートの設問（13）「その他、何かございましたらご記入ください」に対しても、秋田県における哲学のニーズと寄与に関する上述の結論を裏付ける回答がいくつかあった。上では拾いきれなかったもので、最後にそれらをまとめて引用しておきたい。

「今後もぜひこの哲学塾のような素晴らしい試みを続けて頂けるよう希望いたします」（第一回、30代男性）。

「……哲学の先生が〔平田篤胤らの〕秋田の思想家についても、特に若い人に対して伝えるというのをやってくれないかなと思います」（第一回、不明）。

「継続的な開催を望む。資金的な難があるとすれば有料でも」（第一回、60代男性）。

「このような一連の講義は秋田にとって意味があると感じました」（第三回、30代男性）。

「全四回参加させていただきました。若手の先生が中心で、哲学の小難しいイメージを中和するような、非常に分かりやすい、聞きやすい講義で大変有意義でした。……ぜひ今後も機会がありましたら開催をご検討願います」（第四回、30代女性）。

「参加してほんとうに良かったです。このような機会を与えていただきありがとうございました。ふだんの生活の中に、考える、考えを深める種というか、そういうものはたくさんあると思いました。今後も、自分なりに、筋を通して、考えを深めたり、行動に移したりしていきたいと思います」（第五回、30代男性）。

文献

室井尚（2015）。『文系学部解体』。角川新書。

鈴木祐丞（2016）。「哲学の現在地——公開講座『秋田哲学塾』の開催に寄せて」。『秋田魁新報』2016年5月27日号17面。

飲茶（2015）。『史上最強の哲学入門』。河出文庫。

注

¹ このあたりの事情について、詳細は室井（2015）を参照されたい。

² 詳細は鈴木（2016）を参照されたい。

³ 飲茶（2015）。

⁴ ただし、この指示にもかかわらず設問（5）から（12）に繰り返し回答したりピーターも数名いたと思われる。

⁵ 設問（9）で「ある」と回答し設問（10）で「秋田哲学塾」と回答した場合は、設問（9）の回答を「ない」としてカウントした。

〔平成28年11月30日受付
平成28年12月22日受理〕

Demand for Philosophy and its Contribution to Akita Prefecture Public Lectures “Akita-tetsugaku-juku”

Yusuke Suzuki¹

¹ *Research and Education Center for Comprehensive Science, Akita Prefectural University*

Philosophy is currently not sufficiently valued by our nation, whereas people in general expect a great deal from philosophy. In the urban areas of Japan, researchers in philosophy have initiated philosophical activities to meet the expectations of society; for example, the creation of Café philosophique and P4C (Philosophy for Children). However, there have been almost no such activities in Akita Prefecture until now. To consider the possibility of a regional contribution to Akita Prefecture through philosophy, I have investigated demand for philosophy and its contribution to Akita Prefecture. The Research and Education Center for Comprehensive Science of Akita Prefectural University held public lectures called “Akita-tetsugaku-juku” (Akita Philosophical School) five times during 2016, and I obtained sufficient data through questionnaires. From the data, I concluded that although a great potential demand for philosophy among people in Akita Prefecture exists, few opportunities have been offered to them; therefore, the demand for philosophy has not been noticed, even by people themselves. However, philosophy can contribute greatly to Akita Prefecture, as is expected by many people.

Keywords: philosophy, Akita-tetsugaku-juku, regional contribution